第３１回全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会　中止の経緯

２０２０年１０月１９日
日本テコンドー協会
会長　河　明生

はじめに

大きな氷をアイスピックで叩き割ると、氷の破片が目に飛び込んで思わぬ大怪我をする恐れがある。
氷が自然に溶けるまで待つことが最良であろうかと思われる。

感情というやっかいなものを抱えている人間の予期せぬアクシデント対応もしかり。
殆どの人々は予期せぬアクシデントに遭遇すると客観性を忘却し冷静にはなれない。
命にかかわることであれば尚更のこと。不安と恐怖等が彼を襲い冷静な対応を阻害してしまう。
かかる状況下におかれた場合、感情が優先されてしまうのが歴史の教訓である。
国家から家族という小さな集団に至る迄、感情を煽動する主犯的輩が必ず表れる。
彼らはスピードを求める。なぜなら感情が冷め易いことを体験的に知っているからである。
感情が赴くままあること無いこと言いふらし、早急に白黒の結論を急ぐあまり泥沼化をもたらす。
なぜなら、敵対する相手にも感情があり、同様に過激な言動で応じるからである。
主犯的輩によってあれよあれよという間に巻き込まれてしまった人々は、時間、金、信用・信頼等々、より多くのものを失う（死亡者が少ない日本における「チャイナ・コロナ・パニック」を原因とする倒産、破産、自殺、離婚等はその典型)。
ところが、かかる落とし穴に陥った人々も、時の流れと共に
「何故、あの時、自分はああいう対応をしたのだろうか。もっと違った対応があったのではないか」
と過去の主犯的輩や自分自身の言動を冷静に省みることができる。
さりながら「時すでに遅し」というのが、人生の教訓である。

我が４７年の武道人生。
他者から
「武道の極意とは何か？」
と問われれば、
「武道の極意とは、感情を殺すことである」
と躊躇うことなく答えるだろう。
だが、「この極意に到達するためには長い年月と修練とが必要である」と補足するに違いない。

下記の通り、３０年間持続してきた全日本フルコンタクトテコンドー選手権大会（フルコンタクト制は後楽園ホールで１７年間)の中止という重い決断につき緊急発表をしなかったのは次の考えによる。
約２ヶ月間、沈黙を守ってきたのは、限られた時間ではあるが、世界中が「チャイナ・コロナ・パニック」の渦中にあって、少しづつ徐々に、冷静に、客観的に全日ＦＴ本大会の中止を門人達に「浸透」させるためであった。
緊急告知は、感情が優先されてしまい門人達の精神的混乱を招くと考え、根回しを徹底した。
全日ＦＴ本大会ある門人にとっては人生の一部､ある門人にとっては毎年の風物詩かつ生活のリズム、ある会員にとってはＪＴＡ入門の目標等々、
「全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会への思い」に個人差があるからである。
「感情を殺すため」の修行最中の門人には、２ヶ月という時間が必要であった。
以下、中止の経緯を説明する。

一，２０２０年8月３１日、第３１回全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会の開催中止を株式会社東京ドーム・後楽園ホールに通知

（通知書１）

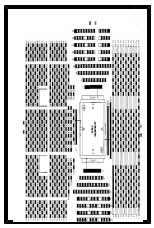
「本会予約の２０２０年１１月２８日（土）夜　開催予定の
第３１回全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会開催不可能による予約取り消しの件」

二，8月上旬、後楽園ホールから担当・盛島理事へ届いた通知書（上記1の解約通知を送った原因）

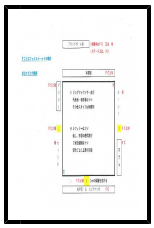
（通知書2）

（通知書3）

（通知書4）



（通知書5）



（通知書6）

三，後楽園ホールへの中止通知書（上記一）の補足説明

1、後楽園ホールからの通知書1頁「リングに上がる者はＰＣＲ検査等を受診し陰性であること」

１）８月時点、ＰＣＲ検査は容易ではなかった。
地方では、保健所や病院が風評被害を恐れ受診すらできなかった。
例えば「あの病院は感染者が出たから行くとうつる」
「あの保健所は感染者が出た。勤務している人間から感染する」
等を恐れ受診拒否。
自宅待機が現実だが、検査に行ったという事実だけで「感染者ではないか」と差別を受ける。

２）不況が深刻化している最中、東京までの旅費に加えて全日本ＦＴ大会の参加費用よりも高いＰＣＲ検査費用３万円を負担する社会人・大学生選手や未成年選手の保護者がいるのか懐疑的

であった。
また、毎年の全日本ＦＴ大会平均参加者６０名×ＰＣＲ検査費用３万円＝１８０万円は、
後楽園ホールの基本賃料の２倍以上で本会は財政的に対応できない。

３）地方の社会人の場合、仮に陽性反応が出た場合、職を失う恐れがあり、受けたがらない。
生存する糧を得るための職場よりも全日本ＦＴ大会を優先しろとは何人も言えない。

2、後楽園ホールからの通知書のリング図「レフリーはなし」

１）リングに慣れているボクシングやキックボクシング、プロレス等のプロ選手とは異なり、
１年に１度しかリングに上らない日本テコンドー協会の選抜選手に主審無しの組手試合は危険。
２ｍ５０ｃｍ前後のリング上から落下した場合、後楽園ホールの床はコンクリートであるから即死あるいは脳等の重度の後遺障害間違いなし。

２）**上記を選手に通知すれば、双方が萎縮して消極的になり組手試合にならない可能性が高い。**

3、国や東京都の何ら経済的保障のない「中止要請」等が出れば最低でも４時間で５１５万円消失

東京都の意にそった後楽園ホールの通知書どおりの対策には、最低でも１００万円はかかる。
仮に応じた選手が存在し、ＪＴＡが対応したとしても、
チャイナコロナ対策に一貫性のない国や東京都が「中止お願い」等の何ら経済的保障のない
「圧力要請」を出せば全て無駄になる。
たとえば、後楽園ホール４時間賃料基本料　８５万円（当日キャンセル料は満額）
+コロナ対策費１００万円
+ＰＣＲ検査選手個人負担総額１８０万円
+その他人件費を除く諸経費　１５０万円＝５１５万円
つまり**最低でも５１５万円が４時間（後楽園ホールの賃貸時間）で消えてしまう。**

四，その他の中止決断理由（一部のみ公表）

「チャイナ・コロナ・パニック」の渦中において政治や経済はもとより人心が大いに乱れている。
政府や厚生労働省、東京都等の都道府県、感染病研究機関と研究者（ただし、現場の医者は除く）
の対応の稚拙さ以外、現状につき誰も非難できないという大前提に立って論述する。

1，フルコンタクト・テコンドー組手レベルの低下

２０２０年は、一度も正常な全日本フルコンタクト・テコンドー選手権大会予選会を開催でき

なかった。
加えて加盟クラブでの練習量も激減しており、門人選手の防御能力が著しく低下したと認識した。
私は、若い頃の武道修業や不良時のケンカ体験等の弱肉強食時代で涵養された「独自の勝負勘」がある。
１９歳から「テコンドー不毛の地＝日本」におけるテコンドー普及の道に身を投じて約４０年。
自慢の一つは、ただの一人も死亡者や後遺障害者をだしていないことである。
これは、上記の「独自の勝負勘」が約４０年の指導時に有効に働いたからだと思う。
春から夏にかけての総見やセミナー等での門人の動き等から「これは危ないな」と
「独自の勝負勘」を観じていた。

2，門人・会員、父親、母親、職場の「トリプル・スタンダード」

狭い自宅での待機が父親、母親、子供間の家庭内トラブルを惹起している。
チャイナコロナ対応でも、父親と母親の意見が食い違っていることが多々あるようだ。
加えて職場の県外移動禁止命令が全日本ＦＴ大会開催を困難にしている。

①ＪＴＡ内では、たとえば、子供は道場に通いたい、父親も賛成、しかし母親が反対であると聞く。
試合参加もしかり。
子供は参加したいから、クラブ長へ「参加します」と伝える。
送り迎えをする父親も、クラブ長へ同意する。
しかし、母親が感染を恐れて反対だから手続きをしていない。
この結果、クラブ長が大会実行委員長へ通知する試合参加事前報告と参加実数とが乖離した
ことがあり、保険手続き等に支障があり、大会中止を余儀なくされた。

②職場による「県外移動禁止命令」によって、某全日本ＦＴ大会予選会では審判が確保できなかった。
審判が確保できずに大会中止というのも初めての経験であった。

上記の①と②とが、全日本ＦＴ大会でも現実味を帯びていた。
さりながら、チャイナ・コロナ・パニック下では、何人も批判・非難することはできない。
仮に、全日本ＦＴ大会を開催した場合、
「出る・出ない」「来い・行けない」「出ると言った・感染が心配だからやむを得ない」等々、
人間関係が大いに乱れ、ＪＴＡ内の信用・信頼関係が崩れるという禍根を残すと判断した。

終わりに

私は戦史を好んで読む。何故、勝ち、敗れたか。
有利な軍が敗れ、不利な軍が勝てた理由は何か。
その後、両国はどのような発展あるいは滅亡を辿ったのか等々、歴史の教訓が溢れているからだ。

今回の全日本ＦＴ大会中止を戦史的にたとえて結びとする。
門人・会員、保護者各位が、それぞれの感性で観じてくれれば良い。

ある新興国の大将は、１年に１度の定期的な遠征にやる気満々であった。
国の規模は小さく、歴史も浅く、財政的にもけっして潤沢ではないが、

他の国に比べて個性的であることは疑いもなく、主力の成員達も、それなりに満足している。
彼らの士気を高めていたのは、新興国の武威を誇示する遠征だった。
信頼している主力も、友軍（後楽園ホール）も協力してくれるはずだった。

ところが、予期せぬ伝染病が全国に蔓延し、政治・経済が混乱し、人心が著しく乱れてしまった。
主力はもとより他の成員も動揺を隠せなかった。
目に見えない伝染病という敵に怯え、軍事教練に身が入らず弱体化しているのが明らかだった。
部隊毎の士卒も、「戦います」と戦意旺盛な者もいれば、どうするか迷っている者もおり、少数ではあるが逃げる準備をしている者もいる。

加えて今まで中立国だった大国（東京都）が騒ぎだし、実質的傘下にあった友軍に権威をかざして圧力をかけた。
大国に抗えない友軍は、進軍を止めたが、新興国の大将に対し、
「天の声で抗えません。
　ですが、ここまで協力したのだから兵糧等の兵站を負担して欲しい。
　本当は、半分負担して欲しいが事情が事情だから３０％に減額する」（キャンセル料）と要求した。

この状況では戦にならない。
敵と戦う以前に内部崩壊してしまうからである。
ゆえに、新興国の大将は決断した。
「自軍の力を十二分に温存して捲土重来を期すべきだ。
　名誉ある撤退、
　　これ以外に国を守る術なし。

　出費がかさむ外征は控え、内政を充実させるべきだ。
　内政の要は、乱れた人心を元に戻すことだ。
　人心が元に戻ったか否かの客観的証は、軍事教練（道場稽古）への自主的かつ積極的参加である。

　災い転じて福と成すともいう。
　疫病という災いを福と成す路線転換も必要ではないか」

以上